

磐城新聞

發行日六十月九
今日は北東の風雨
明日は北の風暴小
午後晴



勿來原 丈氏 (稿)

自然の持つ魅力、其に引母の生れた家がある勿來、
きつらる人間の愛着の生前に父が自ら土地を選定
何と云ふ不可思議。自分にして建てたかたみの家のあ
わびも無く勿來が好きで居る勿來。此處では太陽は美
らな。境邊が許せたらしく輝き樹木は村一杯に派
朴な美に富んだ勿來の風景。大地に生えてゐるもの
に浸つて唯だ一つの仕事を皆新鮮で生き生きとして
して一生を送り度いと思つる。して人々は純朴だ。
である。それが本當に幸福も多し魚も豊かだ。
であるかどうかは分らない。浪の音のみ思ひ出た
が、なせそんなにも勿來静かな夜は、青い月や、
が好きなのか、深い理由は緑色の星がさつと物思はし
何もない。何も彼もまたさげに村を見下ろしてゐる
に入つて居るのだ。前に見
える青い海も後ろに盛り上りもつと、好きな此の第
つてゐる小さな暗緑色の山二の故郷、時折夢にさへも
も、水草の生つてゐる藍色の美しい勿來。自分の一
の沼も、それから村端をををををををををををををを
流れてゐる細い川、雑草ををををををををををををを
持つた堤防と丘、野菜を植えて生活し得る仕事を待つ
るつげられた畑、穀物の實ををををををををををををを
る度々とした耕地、海岸にだ。思つた丈で私の胸
ある船底に海草や貝殻のつををををををををををををを
いてゐる漁船、磯石によつはの難音の都會で丁度遠
かつて砕ける白い浪、昔かの難人々憧れ夢見る様
らある大きな松木細い山思ひつて生きてゐる。既に
路にある淋しい跡所、その私に其れ丈でも無限の幸
跡所の附近にある樹皮の滑福を感ずる。勿來に對する
かな櫻の木、夏になると福を感ずる。勿來に對する
る所の山に咲いてゐる白い愛着は、私にとつて溢るる
百合の花、そこそこ散らばつてゐる人家、小さなス
ぼつてゐる人家、小さなス

許りの喜びだ。しとと
柔かな音を立てて土を濡ら
す細かに降る静かな夕暮れ
の雨を眺めながら私はけ
も思ひ出た勿來の上を走ら
し
(大正十三年頃)

妖刀流轉

邑井 貞吉演
194) 佐々木今朝吉書
因果の妖刀(九)

北支事變

珠雲 小野野平
暴風頻々道見空
即今何處見平風
天兵赫赫取才起
要掃妖氛安海東

明ける空

梓 ゆみ

文藝断片

眞田 誠

自然のもつ美と暴力といふ大なるものな
ものは「アラ」などに描 自然は人を生かすと共に
つづけた自然のようならぬからしむたげを興へ、
のではないかと、私に思 平氣で載しめるのである
のである。

日本の作家たちが、たまた
らうけれども、人間と自然
との結び合せがすくなくとも
も有威するところを知つた作
家の眼とは、もつと遠しこ
さびしさをもつて追つて來
てゐらう

御主人の貧苦を見るに忍び
御主人の貧苦を見るに忍び
御主人の貧苦を見るに忍び
御主人の貧苦を見るに忍び



物語りました
澤田角右衛門の取調に包み
切れや美濃の郡上で盆の上

澤田角右衛門の取調に包み
切れや美濃の郡上で盆の上

澤田角右衛門の取調に包み
切れや美濃の郡上で盆の上

澤田角右衛門の取調に包み
切れや美濃の郡上で盆の上

澤田角右衛門の取調に包み
切れや美濃の郡上で盆の上

吉田眼科醫院

平市紺屋町 電話六八八番

高柳醫院

平市前 電話三三六番

西村屋藥舖

平市新川町 電話五五九番

石綿ムシカマド

平市五丁目

婦人科 五十嵐雄二

平市新川町 電話三六九番

木村病院

平市新川町十九番地

大和田醫院

平市南町一六番地

高柳博明

平市前 電話三三六番

高島屋洋服

平市二丁目 電話三八六番

和洋銅物 釜屋商店

平市五丁目

出征服特賣 高島屋

平市二丁目 電話三八六番

シシ大販賣

平市前 電話三三六番

純菜種油製油

平市一丁目 電話三六四番

シシ直營賣店

平市前 電話三三六番

關彰商店

平市前 電話三三六番

木村病院

平市新川町十九番地

婦人科 五十嵐雄二

平市新川町 電話三六九番

病室増築、手術室完備

平市新川町 電話三六九番

婦人科 五十嵐雄二

平市新川町 電話三六九番

病室増築、手術室完備

平市新川町 電話三六九番

